

「季節の言葉」の活用

日々、子どもたちを教える先生方が抱えるお悩みの中から一つを取り上げ、解決のためのアドバイス掲載するコーナーです。
今回は、松川利広先生と藤井治先生にご登場いただきます。

お悩み

教科書二〜六年に位置づけられている「季節の言葉」の授業のイメージがもてません。このページをどのように活用し、どのような授業をしたらよいのでしょうか。



初めに、「季節の言葉」の教材の意図について確認したいと思います。どのようなことを大切にしたい教材なのでしょう。



奈良教育大学教職大学院教授
松川利広

解決のために

1 まずは、五感を使って季節の言葉を感じ、獲得すること。それから、折に触れて季節の言葉と関わることを大切に。

まずは体験(体感)する

季節の言葉は、移ろい巡る季節の中から生まれ、長い歳月を通して磨かれてきた、伝統的な言語文化として捉えることができます。

季節の言葉は、まずは享受することから始まります。先人が残してくれた季節の言葉を知り、その言葉を視覚や触覚や嗅覚などの五感を働かせて、体験(体感)することが大切です。全体で感じ取ることにより、季節の言葉に息吹をもたらし、命を宿らせるのです。

例えば、春の季語「水ぬるむ」を体験(体感)するには、一月の寒い日に一度、学校のビオトープや池の水に触れる機会を作り、三月になって再び触れさせます。そのとき「そういえば、一月に比べて温かい」と感じ取らせることが大切です。この「そういえば、一月に比べて」という対比意識が、季節の言葉を支える骨格になります。季

節の言葉の学習は、「移ろい」がもとになりますから、年間(四季)を見通し、地域に応じた『季節の言葉』カレンダーを用意しておくといでしょう。体験(体感)を通して獲得した季節の言葉は、生涯にわたる宝物となり、言語生活を心豊かなものにします。

獲得した言葉で季節を感じる

しかし、いつも体験(体感)型の学習を進めることは、時間や場所の関係から現実的ではありません。そのため、教科書では「季節の言葉」の典型を学び、個々の言葉については、朝の会・帰りの会などで「季節の言葉を見つけたい」コーナーを設けたり、自主学习として、新聞やテレビなどから季節の言葉を集めたりすることも考えられます。さらに、総合的な学習の時間や学校行事などの表現活動(俳句、短歌、手紙、作文など)と関わりさせることにより、季節の言葉の深化・拡充を図ると

よいでしょう。

このように、季節の訪れを、先人の残した季節の言葉で感じ分け、新たに季節の言葉創造するという営みは、言語文化の継承・創造の観点からも意義のある言語活動です。例えば「私の『フォト俳句』」「私の『季節の言葉辞典』」など、「私」を軸にした公開型ポトフォリオは、コミュニケーションを誘発し、言語主体である「私」の言葉の力を高めていくうえで有効です。

季節の言葉には、四季折々の行事に関するものもあります。季節の行事には、自然への畏敬の念や感謝の気持ち、自然との共生を願う心が底流をなしています。子どもたちは、季節の行事に関わり、季節の恵みを感じながら、社会性や感性を大きく深く育んでいきます。地域に伝わる行事を通して、地域との連携・協働をいっそう図り、子どもたちが季節の言葉をよりダイナミックに学べるカリキュラム開発や教材化を積極的に進めるとよいでしょう。

松川利広

一九五二年、愛知県生まれ。奈良教育大学附属中学校校長を併任。国語科教育学、児童文学、教師教育を専門とする。奈良県子ども読書活動推進会議委員。監修書に『子どもの育ちと「こころ」(保育出版社)などがある。光村図書小学校「国語」教科書編集委員を務める。

実際にはどのような授業が考えられるのか、具体的な教材を挙げながらお答えいただけます。



2 その時期の季節感を大切に、児童が、言葉とその季節とを結び付けやすくする。



元東京都台東区立育英小学校 校長
藤井 治

「春から夏へ」(五年)を例に

ここでは、季節を感じ取り、受け止める基本ともなる「気象・時候」という視点で編集された五年の「季節の言葉」の中から「春から夏へ」(P.28・29)を取り上げて、具体的な指導を考えてみましょう。次のような目標で指導するとします。

身近な風物や体験から季節を実感し、季節の言葉や俳句を読み味わったり表現したりして、伝統的な言語文化への理解を深め、感性を育む。

四月の中句から下旬に、一時間で指導するという計画を生かすため、まず

ように本時を展開します。

- ①教科書の「春」に当たる部分を読む。「花」は桜を指し、それが春を代表するだけでなく日本人にとって特別な花であることを知る。「花冷え」の他に、「花」の付く言葉を見つめる。辞書を使って調べてもよい。水巴の俳句を読み、写真と重ねながら、情景や心象を想像して話し合う。
- ②調べてきた「花」(桜)の俳句の中からいちばん好きなものについて、簡単な理由を添えて発表し合う。短歌もあってよい。授業後、教師が用意した掲示用の短冊に、俳句と作者名を書き、自分の俳句と並べて掲示するようにする。
- ③「花」(桜)の俳句を作る。いちばんよいと思う句を掲示用の短冊に書き、できた順に黒板に掲示する。友達の俳句について、感想を発表したり質問したりする。花見の体験などを生かして話し合えるように。

次のように考えます。

●教材には「春から夏へ」と、季節の幅があります。一時間で春と初夏を丁寧に指導するのは難しいと考えられます。ですから、教科書では春を比較的、軽く扱い、初夏のほうに重点を置いています。季節への感受性を高めるために、「児童が今、接している季節感」に合わせた扱い方を考えることはとても重要です。教科書の扱い方は、この時期、葉桜の季節から初夏にかかる関東以西の地域では、時候が合っていて指導しやすいでしょう。いっぽう、今が桜の季節か、これから咲く北陸から東北以北は、むしろ春に重点を置いて指導するのが時候に合っている

- ④教科書の「夏」に当たる部分を読む。初夏の言葉や俳句について質問したり感想を発表したりする。そのなかで夏への期待感を高め、「夏は来ぬ」の歌を斉唱する。

初夏に重点を置く学習指導

事前の予習として、初夏を詠んだ俳句を調べたり自分でも考えたりさせるようにし、それをもとにして、次のように本時を展開します。

- ①教科書の「春」に当たる部分を読む。「花」の付く言葉や俳句についての感想、花見の体験を発表し合う。日本人と桜の深い関係を理解する。
- ②春から夏へと季節が移ると感じるときについて発表し合う。教科書の「夏」の部分を読む。初夏を感じる言葉や、素堂、乙二の俳句についての感想、どちらが好きかを発表し合う。

るといえます。ここでは、これら二つの地域に合う授業展開をそれぞれ考えてみることにします。

●本教材を一時間で指導する際、いきなり教科書を開いて授業を始めるのではなく、目標達成は困難です。児童には、事前に教科書に目を通し、季節の俳句を調べたり考えたりさせておきましょう。家の人と、季節や俳句について話し合っておくのもよいでしょう。

春に重点を置く学習指導

事前の予習として、「花」(桜)の俳句を調べたり、自分でも考えたりさせるようにし、それをもとにして、次の

- ③調べてきた初夏の俳句の中からいちばん好きなものを発表し合う。芭蕉や蕪村などの同じ句が重なるだろうが、それもよい。発表された句の好きなところを話し合う。授業後、一句ずつ短冊に書いて掲示する。
- ④初夏を表す言葉を生かして俳句を作る。最もよいと思う句を短冊に書いて黒板に掲示する。友達の俳句の好きなところを発表する。授業後、調べた俳句と並べて掲示する。
- ⑤「夏は来ぬ」の他に知っている初夏の歌を発表し合う。「こいのぼり」「背くらべ」「茶摘み」など。「夏は来ぬ」を斉唱する。

授業の大まかな流れを示しました。その時期、その地域で感じられる季節を大切にすること、家庭学習の時間を活用し、児童が言葉や俳句などその季節とを結び付けられるようにすることを意識し、指導に生かしてください。



藤井 治

一九三四年、長野県生まれ。東京都内の公立小学校での勤務を経て、東京都台東区立育英小学校校長のときに東京都小学校国語教育研究会会長、そして定年退職。監修書に、「どの子も書ける！全教科で役立つ『魔法』UPの授業21」明治図書 などがある。光村図書小学校「国語」教科書編集委員。